夢をみる

会長　采女 博文

新型コロナ禍で、多くの雇用が失われ始めている。非正規労働者、女性労働者が大きなしわ寄せを受けているとのニュースも流れている。

ＧＤＰ（国内総生産）も大きく落ち込んでいる。国や地方自治体も大規模な財政出動によって必死の施策対応を行っている。他方で、日経平均株価などは不思議な動きをする。

こんな日には、一万円札の新しい顔として話題の渋沢栄一を思い出す。渋沢は、日本で最初の銀行、中央銀行（日銀）、製紙会社等の合本組織（株式会社）、株式取引所などの創立に関わり、近代日本の産業界の骨格を形成した人物である。今、『論語と算盤（そろばん）』『雨夜譚（あまよがたり）』が本屋で平積みになっている。富国強兵が共通の信念であった明治、大正時代を生きた人物である。政商による贈収賄渦巻く明治期の商業道徳に満足していない。経営哲学も面白い。「自分は常に事業の経営に任じては、その仕事が国家に必要であって、また道理に合するようにして行きたいと心掛けてきた。仮令その事業が微々たるものであろうとも、自分の利益は少額であるとしても、国家必要の事業を合理的に経営すれば、心は常に楽しんで事に任じられる。」（『論語と算盤』角川文庫から）

労働問題に関しても、王道を説く。法律による規制には消極的な印象を受ける。使用者も労働者も王道を持って向き合うべしという。王道という用語は、現代語訳（守屋淳）だと、思いやりの道と書き改められている。ワークルールを就業規則にしっかり盛り込もうという令和の時代でも意味がある。「労使間のトラブルに関する相談会」の場面でも、使用者にちょっとした気配りがあれば、法律を持ち出さなくてももっと働きやすい職場環境になると思うこともしばしばである。

刻苦勉励によって各人が富むことによって社会と国家も富むという信念だが、バランス感覚がいい。富豪といえど自分独りで儲かった訳ではない。常に社会的恩誼あるを思い、徳義上の義務として社会に尽くすことを忘れてはならぬという。渋沢のような事業家は人の記憶に残る。昭和 30 年代後半、田舎の小学校に 25 メートルプールができた。片隅にちょこっと 1 人の寄贈者の名前が刻まれていた。その頃、毎年のように水難事故があった。

なんといっても、女性活躍推進時代の到来は渋沢の先見である。「女子も男子同様、国民としての才能智徳を与え、倶に相助けてことをなさしめたならば、従来 5 千万の国民中、二千五百万しか用をなさなかった者が、さらに二千五百万人を活用せしめることとなるではないか。」

渋沢の生きた時代は、『女工哀史』の時代でもある。中島みゆきの「糸」の歌のように縦糸と横糸とを織りなすことができる時代に私たちは暮らしている。「委員による出前講座」でもこんな話ができるといいけれども。